伊藤誠・大藪龍介・田畑稔編
『21世紀のマルクス
——マルクス研究の到達点』
（新泉社、二〇一九年）
評者：明石 英人

マルクスの生誕二〇〇年を記念した論文集である本書の「まえがき」には、「マルクス研究の今日的な到達点を提示することを課題」（三頁）としたとある。九名の著名な研究者が、「『資本論』関連の研究」および「哲学、政治理論、歴史理論、未来社会構想、エコロジー論」（四～五頁）という視角から執筆している。そのなかで、伊藤誠氏が、第一章「『資本論』と現代」を担当し、大谷禎之介氏が、第二章「マルクスにとって『資本論』とは何だったのか」を担当したことは、非常に意義深く感じる。日本のマルクス研究は、諸「学派」が切磋琢磨しつつ発展してきたが、「マルクス離れ」が深刻な状況において、いまや「学派」横断的な取り組みが求められる。本書は、この課題を強く意識しているのだろう。

伊藤氏は、宇野派のオーソドックスな原理論・段階論・現状分析の枠組みのもと、「労働力の商品化の無理」論を基軸に、とりわけ一九七〇年代以降の資本主義圏と社会主義における「双対的な危機」（四八頁）を論じる。伊藤氏はベーシック・インカムや地域通貨などに触れながら、二一世紀の社会主義への道のり、また「市場社会主義」のあり方が多様性に富んだものでありうることを強調する。

大谷氏は、対照的に、草稿や書簡などの厳密なテクスト読解を展開し、「プラン問題」を解き明かす。そこから、「経済学批判」の核心が、物象化のもとでのブルジョア経済学の「歴史的な制限性」（六二頁）を暴くことであり、社会を再生産する主体としての「労働する諸個人」が資本主義の運動法則を認識した「自己認識」として、『資本論』は理解されるべきであることを示す。

第三章の佐々木隆治氏「物象化論と『資本論』第一部の理論構造」も、精緻なテクスト読解に基づく手法をとる。物象化を生産関係・生産過程・再生産過程の物象化として分節化し、とりわけ生産関係の物象化を、私的労働という社会的形態に規定された物象化、物象の人格化、制度および法律による（物象化にともなう）軋轢・矛盾の媒介という三段階で把握する点にオリジナリティがある。

一転して、第四章の大黒弘慈氏「資本の統治術」が取る手法は、いわば「現代思想」的である。フーコーの統治性の議論をマルクスの価値形態論のなかに読み取ろうとする試みで、そこに宇野派のアプローチが介在している。「生産論の手前で、資本固有の統治のあり方を流通諸形態のうちに独自に探ろう」（一二八頁）という表現にそれは表れている。著者の言説自体が、権力関係を帯びた「価値空間に揺さぶり」（一五四頁）をかけようとしているのかもしれない。

第五章は田畑稔氏「マルクスの『生活過程』論」であり、『ドイツ・イデオロギー』を中心に関連カテゴリーを徹底的に精査する手法が取られる。「生活過程」は、複雑に分節化した諸契機の「活動的相互媒介」（一八八頁）であることが強調される。それは、土台—上部構造論から一般に連想されるような「静止状態」や「単純な制約関係」（一七五頁）を前提するパースペクティヴをマルクスが採用していないことを証明するためである。

第六章の大藪龍介氏「マルクス政治理論の転回」は、マルクスの時論的な著作に注目し、彼の政治理論が「大きな限界と空白」（二三二頁）を有すると結論づける。一八五〇年代前半までの英仏の情勢分析においては「全般的に、経済的動向の政治への自動的な反映の論調が特徴的であった」（二一三頁）などと見る著者の評価は、評者の見方とは異なるが、その「論調」の転回点を一八五七年恐慌に見いだす点は、大変興味深い。

第七章の平子友長氏「マルクスの歴史把握の変遷——市民社会論マルクス主義批判」で、決定的に重要な役割を果たすのが、マルクスの「マウラー抜粋ノート」である。この歴史学者のゲルマン的共同体に関する著作を研究することで、マルクスは『経済学批判要綱』段階での「本源的所有」に関する歴史的な把握を飛躍的に深めることができた。疎外されざる私的所有を歴史観の要に置く「市民社会論マルクス主義」は、『要綱』の理解そのものにおいても問題があったが、ここでその歴史観全体が鮮やかに批判されている。

第八章の国分幸氏の「非政治的国家と利潤分配制社会主義—ポスト・スターリン主義の社会主義に寄せて」は、社会主義国家論に関して、マルクスとエンゲルスのみならず、バクーニンやレーニンをも比較する。社会に再吸収される国家にも残るはずの管理行政的な機能をめぐる、彼らの微妙な差異を指摘している。官僚制に陥ることを防ぐための、「従業員持株制」のような「共占有」が、マルクスの考える方向性に近いと著者は想定しているようである。

最終章の尾関周二氏の「マルクスの脱近代思想とエコロジー的潜勢力—エコロジーをめぐる連帯の拡大へ向けて」は、『経哲草稿』と『資本論』（およびそれ以後）、そしてウィリアム・モリスの連続性を浮き彫りにしている。若きマルクスの「自然主義と人間主義の統一」というテーゼは、『資本論』における「物質代謝」の亀裂・攪乱への批判に連なり、それが感性豊かなモリスの思想に影響を与えたという。このアプローチには人間—自然関係だけでなく、人間—人間関係の再編という著者のモチーフも認められる。

（あかし　ひでと・駒澤大学）